



矢頭右衛門七教兼 母の墓

# THE 前橋学

## 大蓮寺と 赤穂浪士の母の墓

前橋市の中心市街地で、昭和の香りを色濃く残す弁天通りの中ほどに、地域住民に親しまれている大蓮寺がある。

永正2（1505）年の創建の大蓮寺はその当時、厩橋城下（現在の臨江閣付近）にあったが利根川の氾濫により現在の場所に移転した。県庁裏から臨江閣付近は、利根川の流れが激しいことから、西側を「龍ヶ鼻」、東側を「虎ヶ淵」と呼ばれていた。大蓮寺は虎ヶ淵付近にあったことから「虎淵山寶池院大蓮寺」と称した。院内には、利根川の氾濫防止を祈念した弁財天と大地蔵石像がある。墓苑に入ると一般の墓碑の中に、「忠臣蔵」の中心となる赤穂浪士の一人であった「矢頭右衛門七教兼」（以下「教兼」）の母の墓が甥の郡代多加谷致泰によって建立された墓碑と再建された墓碑が並んでいる。

一般的に「忠臣蔵」と言われているものは「赤穂事件」を基に創作された浄瑠璃や歌舞伎の創作作品の名称である。

「赤穂事件」とは、元禄14（1701）年3月14日、赤穂藩5万石藩主浅野左衛門長矩が江戸城中において高家筆頭吉良上野介義央に切り付けた刃傷事件で、匠頭長矩は即日切腹、赤穂藩はお取り潰し、吉良上野介義央はお咎めなしとなり、これを不服とした赤穂浪士47人が元禄15（1702）年12月14日未明に吉良邸へ討ち入りし、元禄16（1703）年2月4日に切腹した一連の事件の事である。教兼は、赤穂浪士の中でも大石主税に次ぐ年少で、18歳で切腹という短い生涯であった。

教兼の母親の墓所が、なぜ大蓮寺にあるのかその経緯を探ってみた。

教兼の母は、松平大和守家臣である中根弥兵衛の娘で、赤穂藩家臣の矢頭長助教照へ嫁ぎ教兼を含む一男二女を授かる。教照は、赤穂事件後の赤穂城開城の残務処理をしたのち、大坂に移り藩士間の連絡などを行っていたが体調を崩し病死。教兼は、父の遺志を継ぎ赤穂事件に加わり切腹となった。

残された母子たちの生活は困窮を極め、稲葉丹後守正勝の御用人から口上書が出され、ようやく白河藩（藩主松平大和守基知）に仕え母の妹の嫁ぎ先である多加谷経致と叔父である矢頭庄左衛門の家身を寄せた。

寛延2（1749）年、松平大和守朝矩が、上州厩橋城へ国替となり多加谷家も従い、寄宿していた母子たちも前橋へと転居したのである。

教兼の母の生活などその後の詳細は明解ではないが、恐らくこの前橋の地で故郷や教兼を思いながら元気に生活していたのであろう。宝暦2（1752）年、息子の人生を背負うように85年の生涯を閉じた。

教兼本人は、前橋市と縁はないが、母の存在が「教兼・赤穂・前橋」を繋げてくれた。そんな縁に思いを馳せながら、「忠臣蔵」をご堪能してみたいかがたろう。

資料提供：二級建築士事務所設計工房（O）

灘波伸男（群馬県地域文化研究協

議会会員）

協 力：大蓮寺

### 料 亭



# 酒 肴 松 橋 翠



ご宴会プラン 7,800円コース / 9,800円コース 税別 予約受付中

前橋市千代田町3-9-10

TEL(027)231-2320(代)